

灌漑用水遺構・女堀の終末地点の検討

— 女堀は粕川を越えようとしたか？ —

飯 島 義 雄

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

- | | |
|----------------------|-------------------|
| 1. はじめに | 4. 赤城山南麓における女堀の経路 |
| 2. 女堀と粕川との関係のこれまでの議論 | 5. 粕川左岸における用水路 |
| 3. 女堀と粕川の交叉部の検討 | 6. まとめ |

— 要 旨 —

赤城山南麓に長大な姿を遺す中世初期の未完成の灌漑用水遺構である女堀については、近年前橋市上泉町地先で桃ノ木川から取水され、伊勢崎市国定町（旧佐波郡東村国定）の独鉦田と呼ばれる大間々扇状地の湧水を源とする沢まで通水しようとして計画された、と理解されている。これまで、筆者はそうした理解を再検討し、その取水先は上記上泉町地先の桃ノ木川ではなく、前橋市上小出町地先の利根川であり、取水した水の赤城山南麓への引き込み先は前橋市五代町の「古堀敷」の西部である、と想定している。

本稿で問題にするのは、女堀の終末地点である。上泉町の女堀から東方へその痕跡をたどると、伊勢崎市下触町（旧佐波郡赤堀町下触）の粕川右岸まではその連続性が問題なく認識される。しかし、東流する桂川がその内側を流れる女堀の粕川への河口地点に立つと、粕川左岸の伊勢崎市立赤堀南小学校の南で旧赤堀町堀下から旧東村国定の独鉦田に向かう女堀の遺構に問題なく連続させるには困難性が伴う。

地形図や絵図、迅速測図や航空写真等を基にして検討すると、女堀の終末点は粕川である蓋然性が高いと考えられるのである。今後にあつては、少なくとも、粕川を挟んで桂川女堀から旧赤堀町女堀へ問題なく連続するとの既成概念を疑い、そうでない可能性を考えた上で粕川兩岸、とりわけ左岸の旧赤堀町女堀の西端部、現赤堀南小学校の南部の地点における発掘調査が不可欠と言えよう。

キーワード

対象時代 中世
対象地域 赤城山南麓
大間々扇状地桐原面
研究対象 女堀

1. はじめに

赤城山南麓に長大な姿を遺す中世初期の未完成の灌漑用水遺構である女堀については、近年前橋市上泉町地先で桃ノ木川から取水され、伊勢崎市国定町（旧佐波郡東村国定）の独鉦田と呼ばれる大間々扇状地の湧水を源とする沢まで通水しようとして計画されたと一般的に理解されている（群馬県教育委員会 1980）。筆者は、この女堀の遺構への踏査を繰り返す中で、そうした理解における疑問点に対し、ひとつずつ検討を加え自分なりの理解をまとめ公表してきた。つまり、その取水先は上記上泉町地先の桃ノ木川ではなく、前橋市上小出町地先の利根川であり（飯島 2001）、取水した水の赤城山南麓への引き込み先は峰岸純夫が「疑似女堀」（峰岸 1959.8・1959.9）と呼んだ前橋市五代町の「古堀敷」の西部であり、上小出地先で引き込んだ利根川の水は流路を変更させた現在の藤沢川の下部に導き、上泉町の藤沢川左岸に設けた導水路から上毛電鉄線の南の女堀へ連続させようとした、と想定している（飯島 2009）。

さて、本稿で問題にするのは、女堀の終末地点である。上泉町の女堀から東方へその痕跡をたどると、伊勢崎市下舐町（旧佐波郡赤堀町下舐）の粕川右岸まではその連続性が問題なく認識される。しかし、東流する桂川がその内側を流れる女堀（以下、「桂川女堀」と略す。）の粕川への河口地点（図1 - A）に立つと（写真1 - ①）、

粕川左岸の伊勢崎市立赤堀南小学校（以下、「赤堀南小」と略す。）の南で旧赤堀町堀下から旧佐波郡東村国定の独鉦田に向かう女堀（以下、「旧赤堀町女堀」と呼ぶ。）の遺構に問題なく連続させるには困難性が伴う。逆に、赤堀南小前の旧赤堀町女堀の中央部（図1 - B）から旧赤堀町女堀の走向に沿って西を望むと（写真1 - ②）、桂川女堀は南方へずれた位置にある。つまり、粕川を挟んで、桂川女堀と旧赤堀町女堀の走向が食い違うように見え、その両者が連続されていたとすれば、女堀の粕川下流域に位置する遺構が粕川の上流域に存在している遺構と連続していたと考えざるを得ないということになり、理解し難いのである。伊勢崎市現況図（図1）において、赤堀南小の南西部の粕川中央部に、同所の粕川の走向に合わせて北東—南西の軸を設け、ほぼ東西方向の桂川女堀の中央部と赤堀南小学校南の佐波郡女堀の中央部のそれぞれの東西の走向の延長部を粕川の軸に延長した場合、同軸上の両者の距離は約80mである。現状では、桂川女堀の粕川側東部において、やや粕川上流部へ向かうような走向も見られなくはないが、赤堀女堀の赤堀南小学校南部の痕跡では、粕川下流部の桂川女堀へ向かうような走向は確認できず（写真1）、両者を連続させようとするれば、粕川を挟んでクランク状に連結させなければならない。上流部から下流部への連結であればともかく、下流部から上流部への連結は想定されないと考

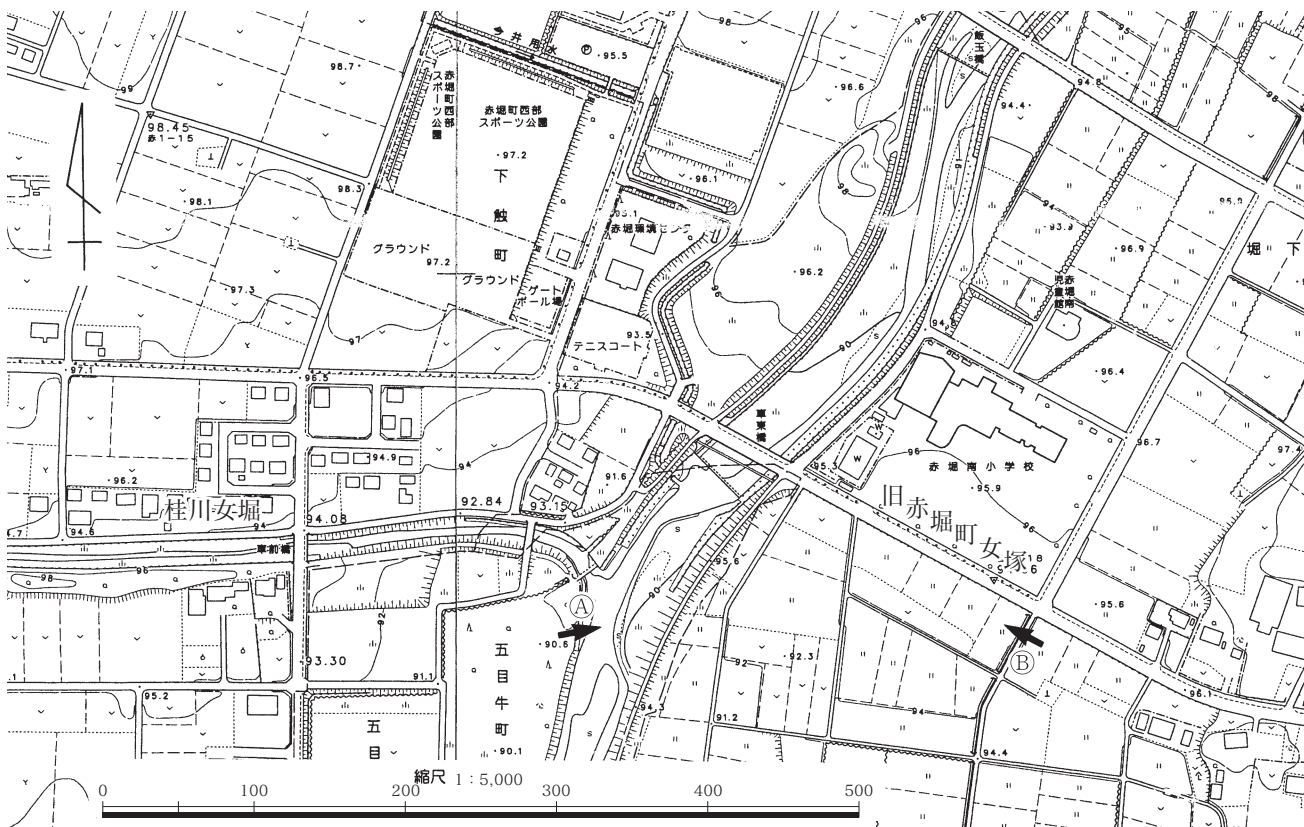


図1 女堀と粕川の「交差点」 縮尺1/5,000（原図 伊勢崎市現況図11（右）・12（左）
縮尺1/2,500 撮影 平成17年7月 測図・現調 平成17年9月）

えるべきであろう。旧赤堀町女堀の西端部は桂川女堀の粕川への河口から粕川を遡った上流部に位置しているのである。現在の一般的な理解のように、果たして女堀は粕川を越えて東方へ導かれようとしていたのか否かを検討するのが本稿の目的である。

女堀の計画された全経路の理解は、その歴史的意味を考える上で基本的な事項である。そのため、その検討にあたっては慎重を期すこととしたい。

2. 女堀と粕川との関係のこれまでの議論

まず、女堀の全経路の内、粕川を挟んだ女堀の東西の遺構の状況についてこれまで検討されてきた経緯を振り返っておきたい。

管見によれば、女堀と粕川との関係について語られた嚆矢は、吉田東伍が編集した『大日本地名辞書』の中である。その「第四冊 下 東国 坂東六州」の「上野勢多郡」における「富田」の項では次のように記載されている（吉田 1904）。「今荒砥村と改む。筑井の北、大胡の南、前橋の東二里、荒砥川は北より降り、富田の東を過ぐ。富田の南に溝渠の址あり、此址は西方上泉の方より起り、岡陵溪谷を横絶して、東に馳せ、荒口、二宮、飯土井を経て、佐位郡波志江沼の北を過ぎ、粕川に至る、高きを削穿し、大略標高九十五米の水準を保ち、三里に渉る。蓋近世の土功にや、竣成せずして止める者なるが、桃木川を分派する計画なりしに似たり。」とあり、「粕川に至る」とその終末が粕川であると認識しているように理解されるのである。

新潟県出身の吉田は、明治44年（1911）8月16日、「歴史地理上州太田講演会」で太田を訪ね「新田郡の治水墾田」と題して講演を行っていることは確かめられるが（吉田 1915、高橋 1919）、女堀を実地踏査したか否かは不明であり、その可能性は低いと思われる。全国の地誌について大部な「辞書」を編集した吉田は、当時の「政府の秘閣本である地志類の閲覧」や「上野図書館

に行ったり、書店で買い求めたり、友人たちの蔵書を借りるなどして執筆に専念し、「地方の名も知らない人から珍しい書物を送」られたりしながら原稿を執筆したとされる（千田 2003）。吉田が女堀を訪れていないとすれば、依拠した文献があるはずであるが、これまでのところ、その特定には至っていない。

現在の時点で見れば、上記の吉田の女堀に関する認識においてはその施工時期の想定に問題があり、取水先にも首肯できない点があるが、その経路について「粕川に至る」といわば言い切っているように受け取れる点に注目しなければならないと考えるのである。

そして、この吉田が編集した『大日本地名辞書』が日本全国の地誌の理解に大きな影響を与える中で、女堀の理解についても例外ではなかった。

大正12年（1922）に編集されたと推定される『荒砥村郷土誌資料』（荒砥第一尋常高等小学校 1922、写真2）（註1）では、女堀の経路について述べる中で、「佐波郡に至りては粕川と交叉す、（大日本地名一筆者補足）辞書にはたゞ粕川に至る。とせらるれども之より佐波郡を東南に向ひて通過し、全郡東村に至りて南下す。」とあり、桂川女堀から粕川東岸の旧赤堀町女堀に連続すると捉えるべきとの認識が示され、吉田の見解を否定した上で現在の一般的な理解の認識が示されたのである。

その後、群馬県師範学校で人文地理学の教鞭をとった剣持常昌は、県内における「平地帯」・「山麓地帯」における灌漑用水と米作りの特質を地域ごとに検討した（剣持 1934）。その「大間々扇状地域」の「北部扇状地帯」における沿革の中で、「女堀は時代は判明しないが（中世鎌倉時代のものと云われる）勢多郡南橘村字上小出の地より利根の分流、桃木川の河水を佐波郡東村の西国定を経てこの北部扇状地に灌漑せんとを試みの下に実行せられたもので、（中略）現在に於いても上小出と国定の間にはその遺構をみることが出来る」とし、女堀は利根川の水を「上小出の地」から大間々扇状地の北部まで引



写真1 女堀と粕川の交差点

①桂川の粕川への流入口から旧赤堀町女堀を望む。 ②旧赤堀町女堀内から西方を望む。

こうしたものとしての理解が示された。

こうした経過の中、上記『荒砥村郷土誌資料』がまとめられた17年後の昭和14年（1939）、『荒砥村郷土史』（荒砥第二尋常高等小学校 1939）（註2）において、同『資料』を引用しながら、女堀に関して注目すべき見解が述べられるのである。それによれば女堀が「未完成のものか完成のものか」と問い、「現在の状態からすれば未完成のまゝ、終った様に見られる点が多いが又所によっては完成したものがくづれて用をなさなくなったとも見られる。現在のまゝでは一般に川の交差点が低く曖昧になって居るのは単に設計が面倒な為に後廻しになったとも考えられるが又その川が時々氾濫したために女堀の

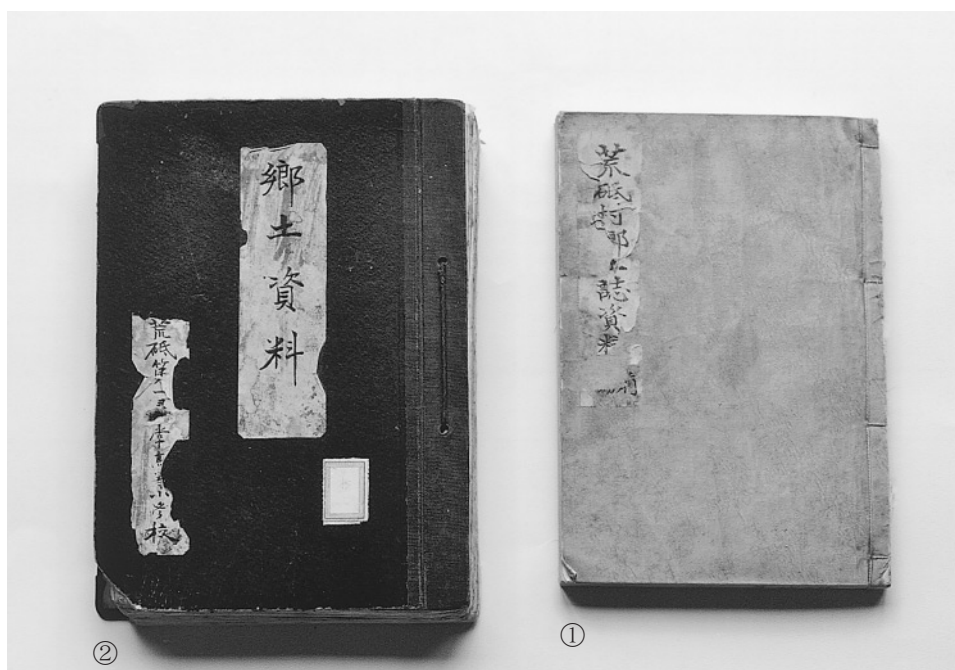
堤をくづしたとも考へられる。（中略）赤堀村の下触の南の堤の切れ地にも中央に川をはさみ、又粕川の両側、殊に東側が徹底的に痕跡がみられないのは、もとは堤があったものが後年になくなったもので何れも川の影響がある様に思はれる。同地方が堀下と云ふ地名であることでも知られる。只田部井に至って全く痕跡を失ってゐるが之れは恐らく田部井か或は田部井より程遠からぬ所が此の堀の最終目的地であった様に思はれる。何れにしても此の堀は一度は完全に作り切ったものではあるまいか。」としているのである。本稿の執筆者は、『荒砥村郷土誌資料』を頻繁に引用しており、そこにおける旧赤堀町女堀の記述を認識していない筈はない。また、先の大

写真2

『荒砥村郷土誌資料』

（荒砥第一尋常高等小学校
1922 前橋市立荒子小
学校保管）

- ①『荒砥村郷土誌資料
前編』
- ②『郷土資料 荒砥第一
尋常高等小学校』



『荒砥村郷土誌資料』

（前略）

（三）古堀

1. 女堀の溝址

本村のはゞ中央を東西に横ぎりて女堀の溝址あり。茲にその遺址及開穿の時代を考查すべし。

《溝渠の状態》

吉田氏大日本地名辞書「富田」の条に曰く「富田の南に溝渠の址あり、此の址は西方上泉の方より起り、岡陵溪谷を横絶して東に馳せ、荒口、二之宮、飯土井を経て佐波郡波志江沼の北を過ぎ粕川に至る。高きを削穿し、低きに築堤し、大略標高九十五米の水準を保ち、三里に渉る、蓋し近世の土功にや、竣成せずして、止めるものなるが、桃木川を分派する計画なりしに似たり」以上吉田氏地名辞書の記載を検し、虚実を考証し、其の構造を述べべし。辞書に此の址は西方上泉の方より起り。とあり、又桃木川を分派する計画なりしに似たり。とあれど誤なり、女堀の起点は利根川（現今の広瀬川）にして恐らく前橋市岩神の北方なりしならん。その証拠には南橋村下小出の南端前橋市との境に長山と称する築堤の趾存し、それより東方に溝痕延馳す（ほゞ桃木川の南に沿ふてはしる）但し現在には耕平せられてその趾、明ならず、而してその東端は上泉（玉泉寺の西方）に於て桃木川に合し、石関に至りて之と分れて東進す。依つて女堀は桃木川を分派する計画なる説は誤れり。次の項（開穿時代）を参照すべし。

石関よりは堀ノ下、堤、江木（石関、堤、堀の下の地名は女堀に関係ある名称なるべし。）を過て本村大字富田、吹地の南端に現はれ更に東して荒砥川に交叉し（観音山の北部にて）荒砥川旧河床の底地を東南に走り荒口の南端を東進、鶴谷沼溜井の南に沿ひ之より二之宮の北部を横ぎり、長堤、石堤の両溜井に連る（この両溜井は女堀をその儘、東西を堰き止めて作る。依つてこの附近、最もよく女堀の原型を保持す。この溝幅十間余）更に荒子の東南端を東進、飯土井の北部を横切りて東大室の南部に出で佐波郡三郷村波志江の北に出ず。（石山観音の南）本村に遺れる女堀はや、完全なる原型を保ち、本村の中央より僅南に依りて、西より微東南に向ふ、この長さ凡そ、一里十五町溝址を利用して作れる溜井三個あり。佐波郡に至りては粕川と交叉す、辞書にはたゞ粕川に至る。とせらるれども之より佐波郡を東南に向ひて通過し、全郡東村に至りて南下す。それより下流は痕址不明なり。或は開穿成功の見込なき為工を中止せしものか。されど溝道の方より察するに測名より境に出で利根川に注ぐの目算なりしならんか。或は又更に遠く新田郡方面へまで通せしめんとせしものか。（因に本溝の下流に就ては今後の踏査によりて詳説すべし。）

（後略）

戦後の米軍による昭和23年（1948）撮影の航空写真（写真3）では堀の痕跡と堀の南側の堤の存在が広範囲で認められており、現在も部分的に旧赤堀町女堀の溝跡及び主として南側の堤が遺存し、旧赤堀町女堀を視認していないことは想定できない。本稿執筆者は「堤」の存

否に注目しているように見られ、「堤」の不存在で堀の存在を否定しているようにも受け取れるが、「此の堀」と記載しており旧赤堀町女堀の「堀」跡としての連続する窪地とその南部を中心とした堤を認識していない訳はないのである。それでいながら、同書における女堀と粕

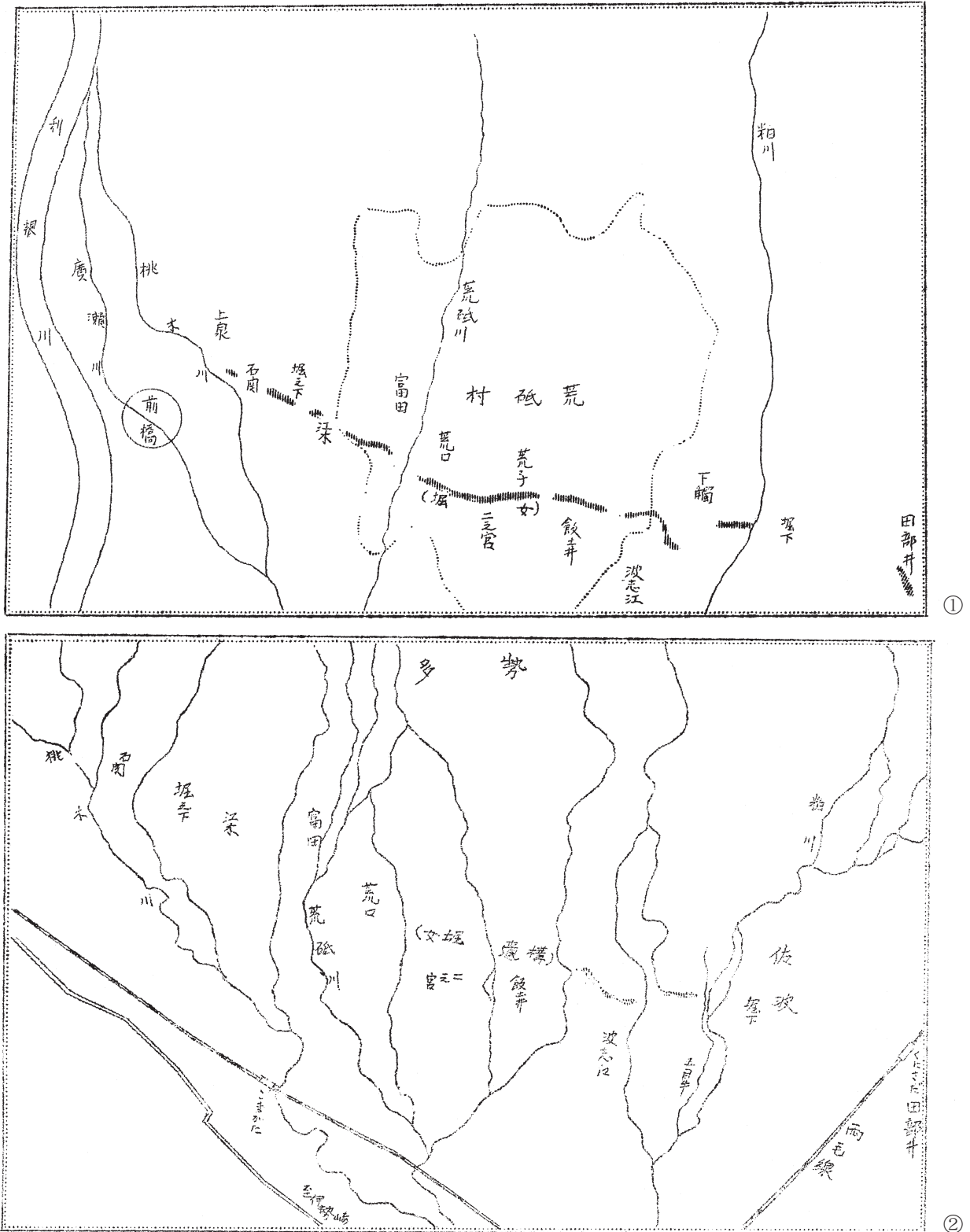


図2 『荒砥村郷土史』（荒砥第二尋常高等小学校 1939）における挿図

①冒頭 ②中央部

川の交叉地点において、「殊に東側が徹底的に痕跡がみられない」としており、女堀の項目の冒頭及び中央部に掲載された女堀の2種類の経路図(図2)でも粕川以東と田部井の間は空白のままである。このことは、粕川に接する東西の地点における堤の不存在だけを問題にして女堀の痕跡を語っているのではなく、本稿執筆者は桂川女堀が旧赤堀町女堀に連結するものとして考えていないものと理解するのである。こうした理解の妥当性は、後述する周東隆一が先の大戦前後の女堀の状態について、粕川右岸の赤堀女堀は「堀下以下国定迄の遺存状態不良である。終戦前までは沿線の大分は山林でその中を明瞭に溝渠の址を識別することが出来たが、その当時でも築堤、溝渠共に相当に減耗埋没した状態に置かれ幅は大約10米、深さは約3米位に減じてゐた。現在は完全に開墾されて一望の畑地と化し堤址は崩されその土で溝址は埋められつつある」(周東 1950)との状況報告が支持しているものと想定される。

そして、前記の吉田や剣持の女堀についての見解を踏まえた上で、考古学研究者周東隆一は先の大戦中の踏査に加え、戦後の昭和25年（1950）に女堀の「上泉の推定取入口から国定駅西方の終末点までの全域」の調査に基づき、女堀の現状を報告し、その規模・構造、構築の目的とその時代等が考察された（周東 1950）。その中で周東は、女堀は「波志江を過ぎ下触で方向を北東に転じた遺構は下組に到つて再び東に向かひ粕川を越えてか

ら堀下、下原を過ぎ両毛線国定駅の西南方200米の地点迄ほとんど一直線をなして走ってゐる。下組附近では遺構中を現在一溝渠が通じ粕川に放流されてゐる」とした。ここでは粕川を挟んでの女堀の連続の可否の問題は検討されていない。

さらに、歴史学研究者の峰岸純夫は、女堀の全面的な検討を行う中で（峰岸 1959.7・8・9・10・11・12、1960）、女堀は「石関から、田部井まで延々と連つている」とし（峰岸 1959.9）、前橋市五代町の「古堀敷」を「疑似女堀」として女堀と連続するものとは位置づけず、粕川を挟んで桂川女堀と旧赤堀町女堀を連続させ、旧佐波郡東村の独鉈田を終了点とした（図3）。ここに、以後の女堀研究の基本的な枠組みが形成されたと言える。

こうした経緯の後、県内の各時代の遺構に通じた歴史学研究者の近藤義雄は、女堀の経路について述べる中で、「東端は粕川附近まで確認出来る大遺構である」と女堀の終末点の議論に警鐘を鳴らすかのように記している(近藤 1961)。

その後の歴史学あるいは考古学等の研究者がこの女堀が粕川を越えようとしたか否かの問題を具体的に論じている例を知らない

こうした経過を踏まえれば、女堀の経路については、少なくとも桂川女堀から旧赤堀町女堀は連続すると直ちに理解することなく、具体的に検討することが必要であ

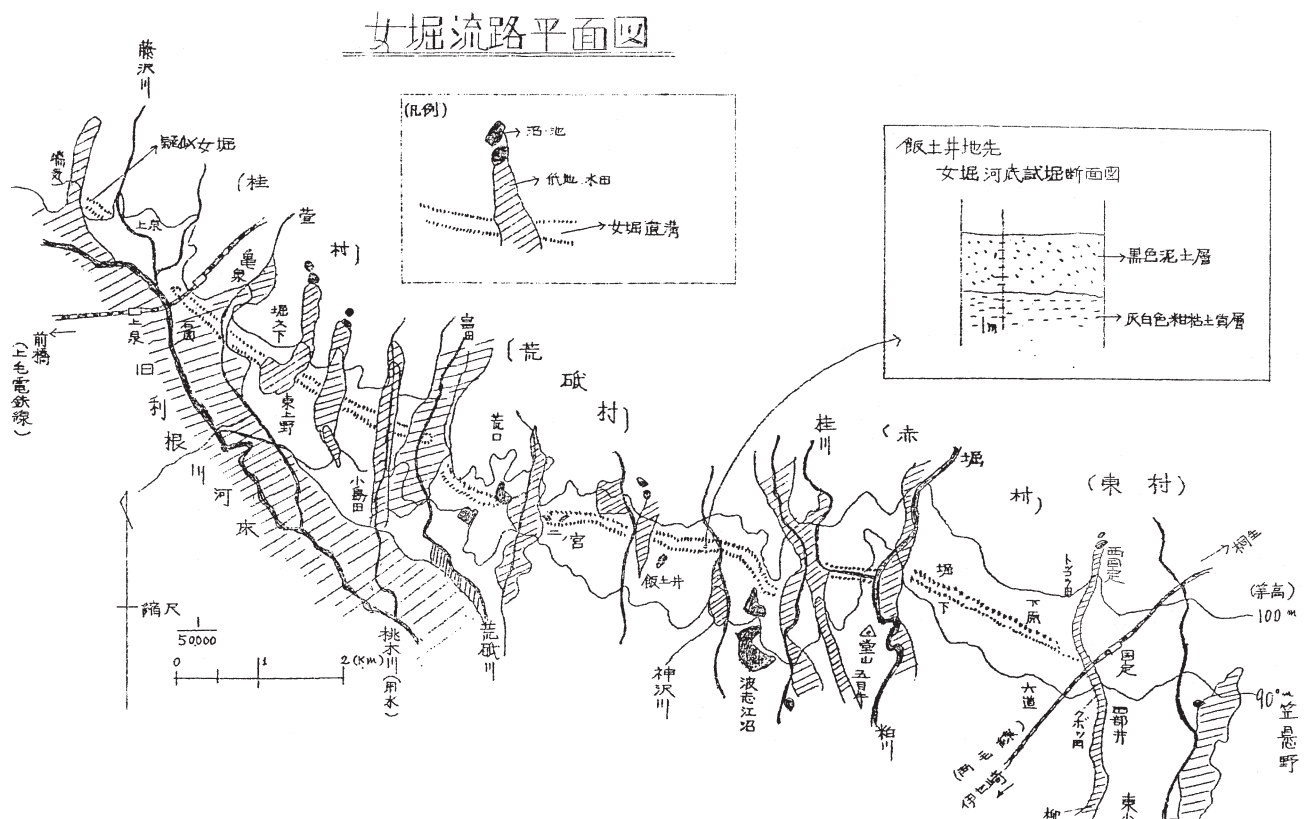


図3 峰岸純夫による女堀の経路の理解（峰岸 1959.9による。）

と考えざるを得ないのである。

なお、考古学研究者である梅澤重昭は、女堀の歴史地理学的考察の結果として、「女堀は、その端末にあたる早川流域の沖積地の水田開発を目論んで計画されたものでもあったが、それに尽きるものではない。むしろ、桃ノ木川流域の沖積地、そして、伊勢崎台地地域の沖積地の灌漑水利の補完を意図する広域灌漑用水路であった」との見解を示している（梅澤 2004）。この見解の中で、本稿に関係した理解を見ると、「女堀は、現粕川を挟んで地図上に定規を当てて新たに桂川を起点に水路を設定したかのごとき線形で延びている」としており、粕川を挟んでの桂川女堀と旧赤堀町女堀の連続性を前提にしている。本稿は、この梅澤の理解の妥当性をも検討することになる。梅澤の上記見解については検討すべき課題が多岐にわたるため、機会を改めて検討を加えることとしたい。

3. 女堀と粕川の交叉部の検討

それでは、冒頭で述べた粕川を挟んで桂川女堀と旧赤堀町女堀を連続させた場合の不調和を踏まえ、女堀と粕川の交叉部について、現状で得られる地形図、絵図、航空写真等を使用して検討し、問題点を整理することとしたい。

まず、近年における開発による大規模な地形変化が行われる以前の状況を、明治時代初期の地券発行にかかる地引絵図においてみてみよう。

同絵図の明治6年（1873）に作成された「佐位郡堀下村」の該当部で水田として利用されていた地目（上田・中田・下田・下々田・新下々田・上畑田成・中畑田成・下畑田成・林畑田成）を抽出すると、図4のとおりとなる。旧赤堀町女堀内の水田への水の供給先を追うと、粕川の上流部から引水し、粕川左岸に導水された飯玉用水に依っていることが判明する。現在、飯玉用水は赤堀南小の北方の赤堀町せせらぎ公園の南西部で粕川から引水され、赤堀南小の東辺に沿って南方に導かれ、旧赤堀町女堀内の水田も潤している。そして、伊勢崎市現況図と対比してみると、各地点間の位置関係は正確とはいえないが、赤堀南小学校南の赤堀女堀はほぼ直線状であることは確認されるものと思われる。また、明治18年（1885）に参謀本部陸軍部測量局が製作した迅速測図及びその原図によれば（図5）、水田と桑及び畑の地目もほぼ照合する。つまり、現況の赤堀南小学校南部の赤堀女堀は明治6年時点でも直線的に粕川に向かっており、粕川の少し下流に西から向かう桂川女堀へ連続するような痕跡は見だし難いのである。

また、現況（図1）を迅速測図及びその原図（図5-①）と比較しながら、粕川の流路とその蛇行の結果生じた攻撃斜面との状況を見ると、現在の赤堀南小の西部は

粕川が東方へ流路を向けた際の攻撃斜面と考えられる。その反転した流れの結果は桂川女堀の粕川への河口からその下流域に攻撃斜面を形成している。この桂川女堀の粕川への河口からその下流域の対岸には、「桑及び畑」の微高地が粕川の南に向かう流路に沿うように西にゆるやかな弧を描きながら、南北方向に2列認められる。さらにそのそれぞれの東部には水田が存在し低地であることが想定される。こうした状況は、この南北の2列の微高地は粕川の蛇行が進行する過程で形成された自然堤防であり、それらの間及びそれらの東部の水田域は後背湿地、さらに東部の水田地の台地部との境は粕川のある時期の攻撃斜面であったことを示しているものと考えられる。問題はこの自然堤防の形成時期である。粕川の本地点から約1.7km下流域に位置する五目牛清水田遺跡（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993）では、天仁元年（1108）に浅間山が噴火した際に降下したとされ浅間Bテフラ（As-B）以下11枚にわたる洪水層で覆われた水田が検出されており、弘仁9年（818）の地震に伴う大規模な氾濫を含め、粕川がこれまで何度も氾濫しており、上流域での活発な浸食活動があったことが知られる。しかし、女堀が掘削されたAs-B降下以後では、大規模な地形変化を伴うような氾濫は想定されないように考えられる。また、桂川女堀の東端部の盛土が粕川により浸食されているとは見えず、桂川女堀の築造時と明治18年（1885）段階では女堀の流路及びその兩岸に大きな変化は想定できない。つまり、桂川女堀と旧赤堀町女堀が連続していたものとすれば、粕川の兩岸で地形変化がもたらされていた筈であるが、そうした痕跡は認められないのである。最終的には発掘調査により旧赤堀町女堀と当該地点における地形の形成のされ方を確認しなければならないが、明治期の地形図と現況における地形のあり方を検討する限りにおいて、地形桂川女堀と旧赤堀町女堀は連続していたとする積極的な痕跡は認められず、両者は連続されてはいなかったとの想定も許されるものと考えたいのである。

4. 赤城山南麓における女堀の経路

次に、上記で見た粕川を挟んでの桂川女堀と旧赤堀町女堀の走向の食い違いを女堀全体の中で検討するため、赤城山南麓における女堀の経路の概要を把握しておきたい。なお、女堀の経路における交叉する河川との調整方法については、別の機会に検討する予定である。

女堀の赤城山南麓への引き込み方については、前稿（飯島 2009）でやや詳しく述べたので本稿では割愛し、上泉町の藤沢川左岸から粕川までの経路のあり方を対象とする。使用する図は、国土地理院の1/25,000の地形図、迅速測図原図と迅速測図である（図6～8）。迅速測図原図と迅速測図で女堀の痕跡を抽出し、それを基に

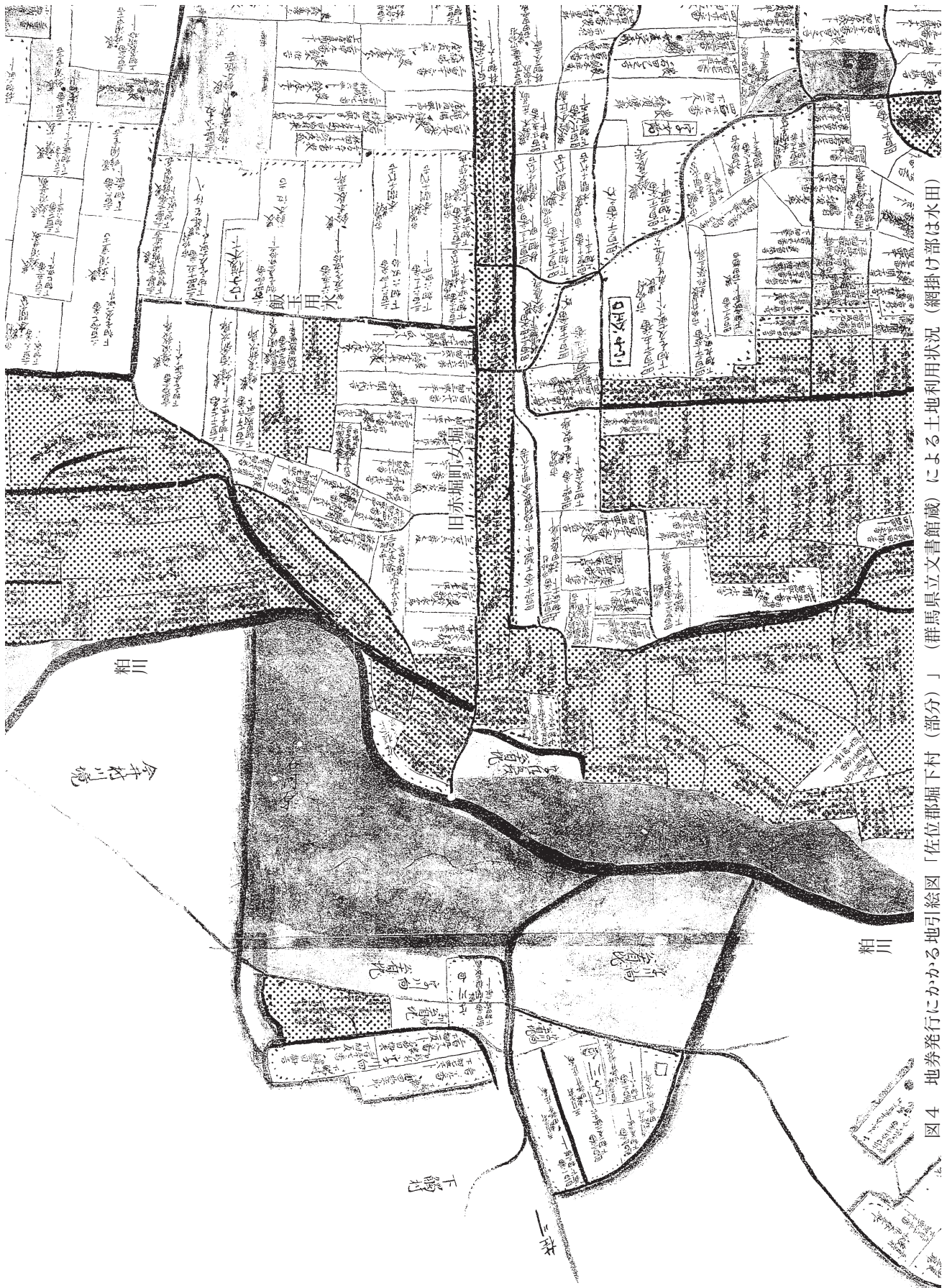


図4 地券発行にかかると地引絵図「佐位郡堀下村（部分）」（群馬県立文書館蔵）による土地利用状況（網掛け部は水田）

して地形図上の経路を復元し、その特徴を理解した。

上流部から下流部に向けて経路を追ってみよう。

上泉町から前橋市富田町まではほぼ直線上で、宝禅寺の南や江木町の台地部で少し南方へ弧状になるように見えるが、それぞれの下流部が全体の走向から大きくずれることはない。

富田町の東の荒砥川の谷底平野から前橋市荒子町までは総体的にやや大きく南方に弧状になるが、その中でも荒口町と二之宮町では小範囲の中でさらに南方に少し弧状になる。富田と荒砥川の間の経路については不明であるが、明治18年(1885)の測量時に荒砥川の右岸に存在した権現山が女堀の南側の盛土であったことが発掘調査で確かめられており(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009)、富田の東部から荒子まで、直線上に導かれたものと想定される。この間を概観すると、荒口と荒子の台地部をやや大きく南側に迂回し、さらに荒口と荒子の台地で小さく南方へ弧状に迂回しているものの、富田から荒子の走向に戻っている。

荒子から粕川までの間には、石山の丘陵地があり、この部分では大きく南方へ迂回することになるが、粕川の西方の走向は荒子からの走向に戻るのである。

上記の全体の経路を概観すれば、上泉町の藤沢川左岸(標高約100m)から桂川女堀の粕川への河口(標高約93m)までの約9kmの間の経路を総体的にみると、赤城山の南麓から南東麓の緩斜面を南西から南東方向に向け、一部の南方への弧状を除けば、ほぼ直線状である。

上泉町の藤沢川左岸から粕川まで、台地部や丘陵部で大きく山麓の傾斜の緩い南方へ迂回することになるが、かならずその直近の上流部の走向の延長線上もしくはそ

の下位に戻っている。

その南方への最大のたわみは伊勢崎市下触町の石山の丘陵地の南であり、その他に荒口町や荒口町などでのやや小さい南方へのたわみがある。このたわみの部分の上・下流部を見てみると、その経路は、ほぼ直線状であり、たわみの部分についてはほぼ等高線に沿わせている。これは、通水を目的として底面の傾斜を一定に保つとした場合、掘削土量を大きくしないための合理的方法であると言えよう。つまり、こうした南方へのたわみをなしたとしても、全体的な経路の方向の中では、下流部において全体の直線的な走向の中に戻ると言えよう。つまり、水の掘削法面との摩擦力を最小限にしようとする工夫と考えられるのである。

それでは、粕川を挟んだ桂川女堀と旧赤堀町女堀との位置関係を見ると、その走向が粕川を境にして同一の連続した堀とした場合には女堀の下流域の旧赤堀町女堀が粕川上流域に存在して食い違っており、女堀全体の走向のありかたとは不調和であり、不自然であると考えられる。つまり、女堀全体の設計仕様の中では位置づけられないのである。

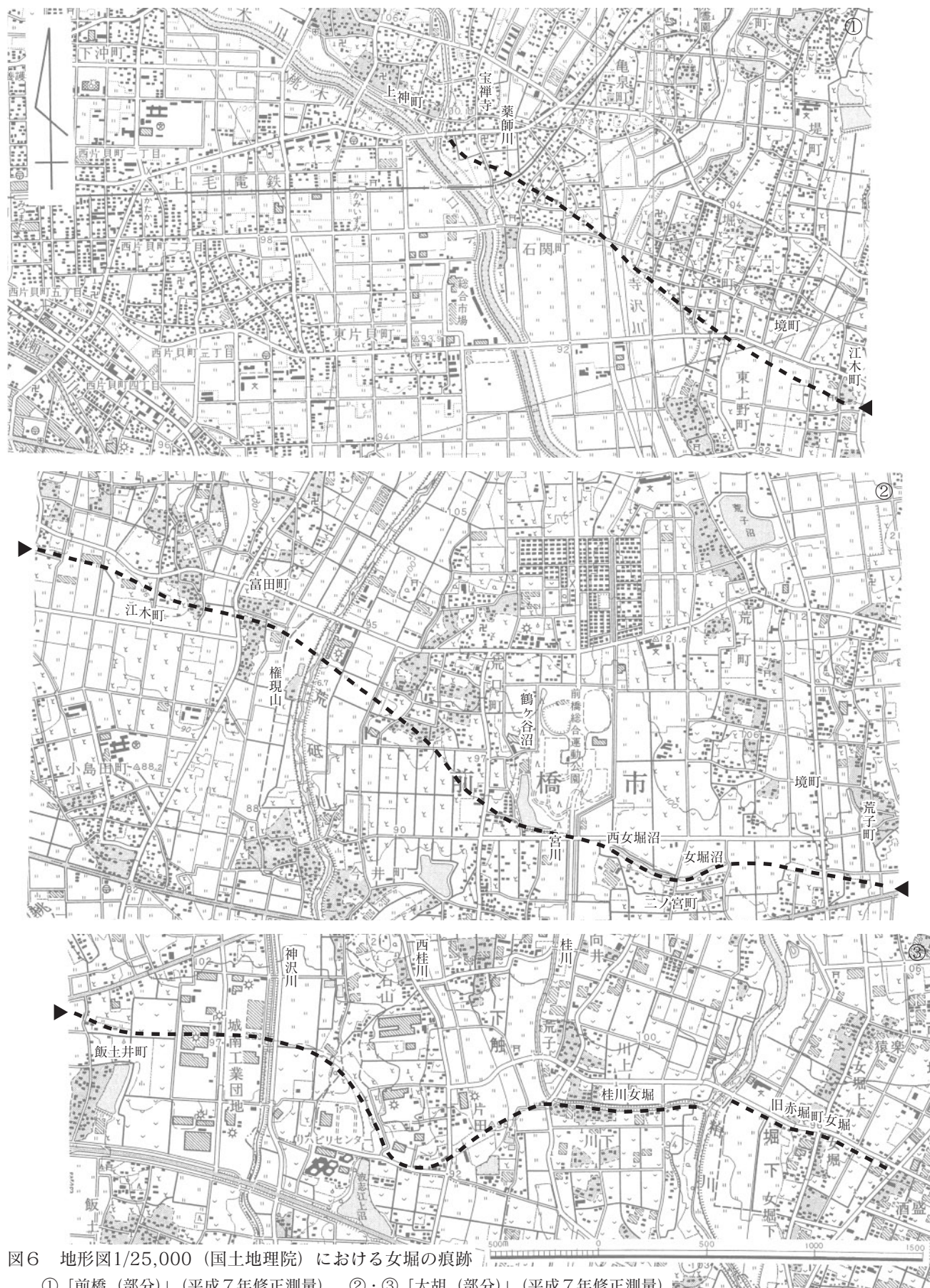
上記の状況をまとめると、問題にした女堀の対象地は赤城山南麓から東南麓と河川により浸食された谷底平野そして大間々扇状地桐原面(澤口 2010)である。地形面は異なるものの全体的には女堀は北から南への緩斜面を横断することになり、丘陵部と谷部分との間の高低差はあるものの地形的に大きな変化は存在しない。そうした状況の中で、女堀が河川あるいは河川により浸食されて形成された谷底平野を越える場合、基本的には北西方向から南東方向へ角度の強弱はあるもののその経路は



図5 桂川女堀と旧赤堀町女堀と粕川の位置関係

①迅速測図原図「群馬県上野国南勢多郡東大室村」(911)(部分)(迅速測図原図復刻版編集委員会編 1991)

②迅速測図「大胡町」(部分)(桐生近傍第廿五号(第一師管地方迅速測図))



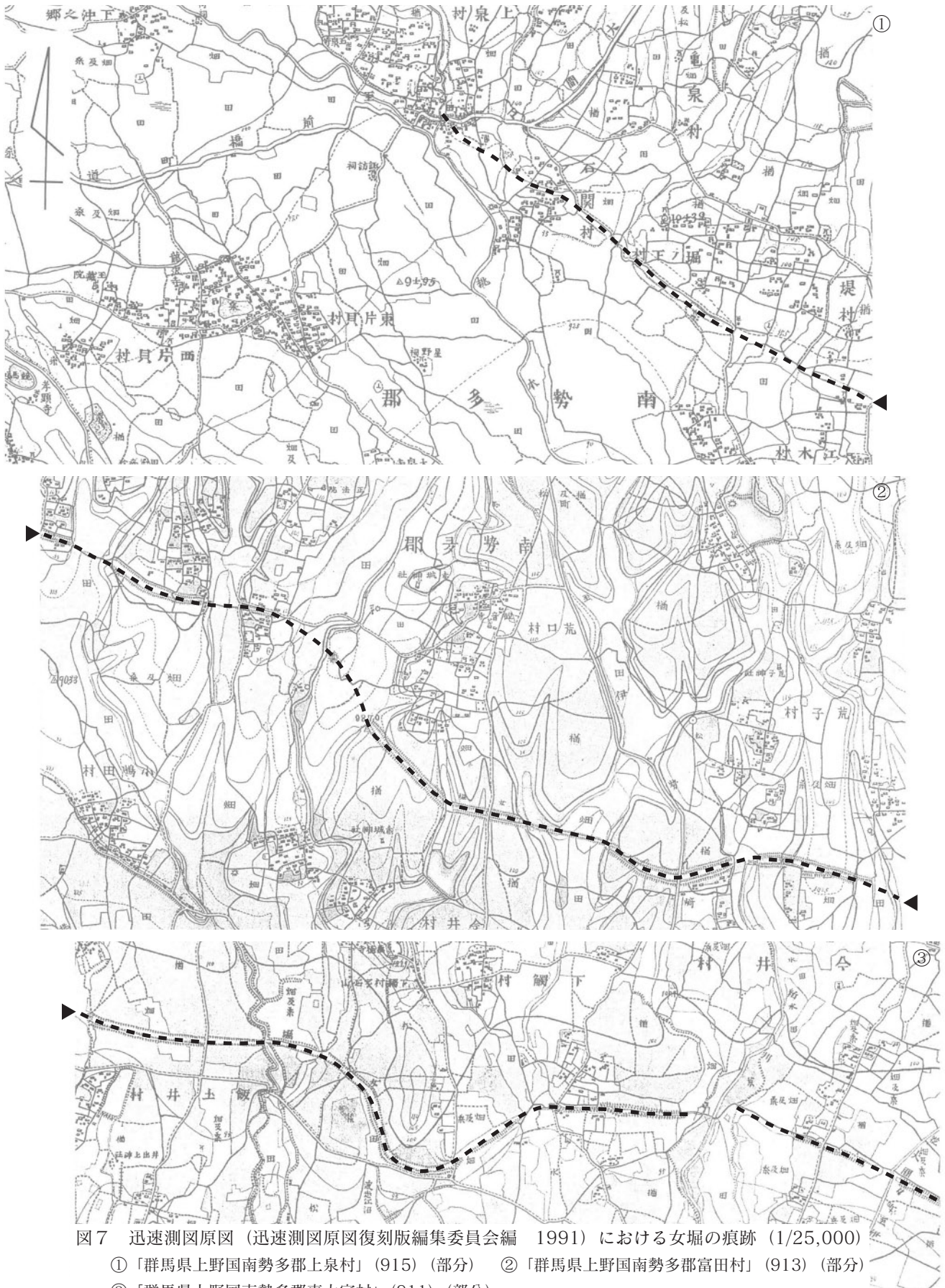


図7 迅速測図原図(迅速測図原図復刻版編集委員会編 1991)における女堀の痕跡(1/25,000)

①「群馬県上野国南勢多郡上泉村」(915)(部分) ②「群馬県上野国南勢多郡富田村」(913)(部分)

③「群馬県上野国南勢多郡東大室村」(911)(部分)

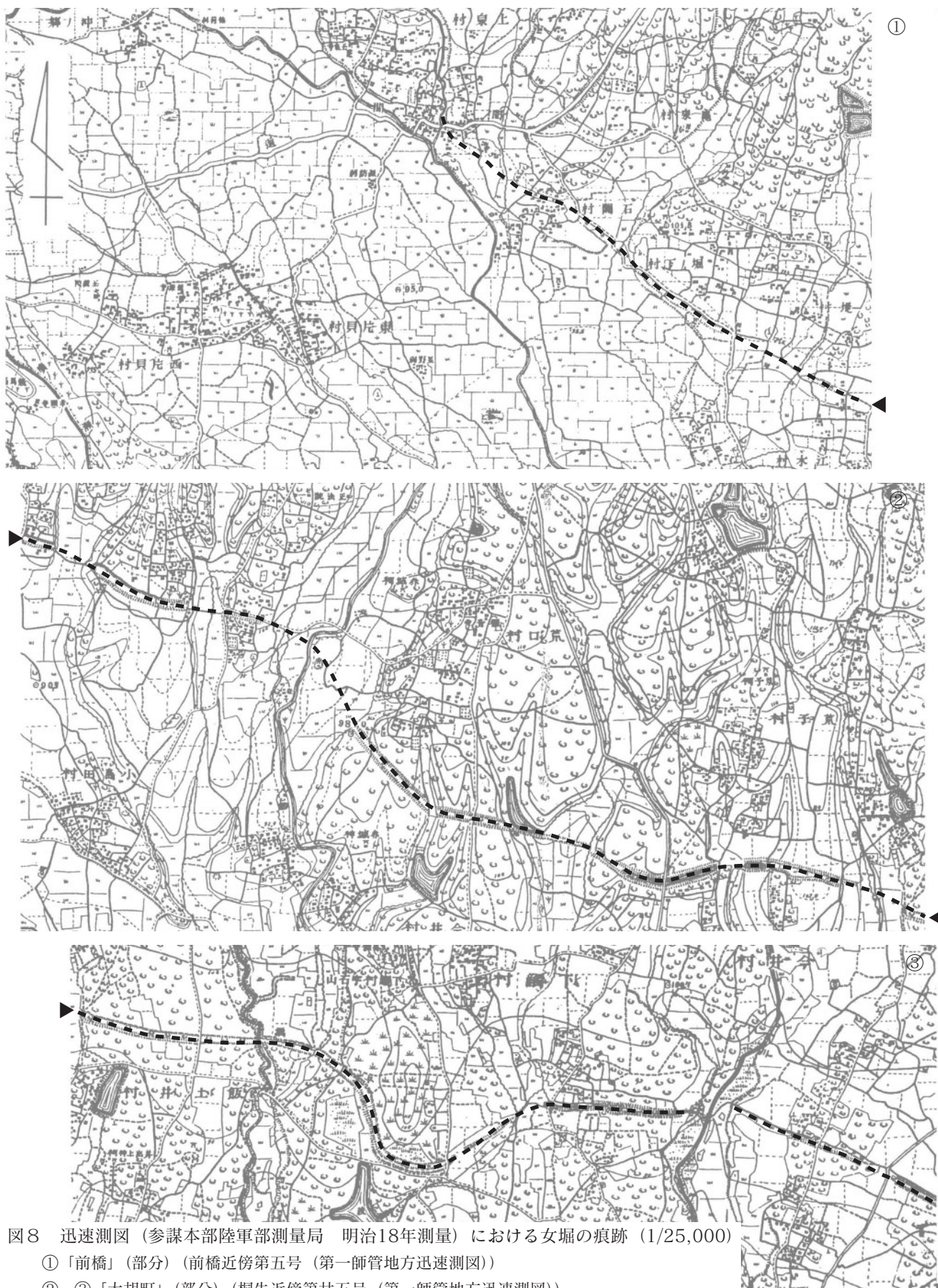


図8 迅速測図 (参謀本部陸軍部測量局 明治18年測量) における女堀の痕跡 (1/25,000)

① 「前橋」(部分) (前橋近傍第五号 (第一師管地方迅速測図))

②・③ 「大胡町」(部分) (桐生近傍第廿五号 (第一師管地方迅速測図))

ほぼ直線的に選択されている。そして丘陵地を越える際、底面高度を一定の傾斜角に保つ関係から掘削土量を少なくするため丘陵を南方へ迂回することとなる。迂回した後の経路の選択は、迂回場所の直近の西部の直線の延長上より上位に設定されることはないことが読みとれる。それは、水路における流速の維持のための一定の勾配の確保と掘削土量の減少そして作業の効率化を総合して選択した結果（仲野・山崎 1927）と言えよう。

このように、赤城山麓の女堀の経路を概観した場合、粕川を挟んでの桂川女堀と旧赤堀町女堀の食い違いの状況は際立つこととなり、その状況は前項で見た両者の連続性の否定を支持していると理解されるのである。

5. 粕川左岸における用水路

本稿で問題にしている粕川を挟んでの桂川女堀と旧赤堀町女堀との連続性の問題を検討する上で、旧赤堀町女堀周辺の用水遺構の状況を見ることとする。本地域において発掘調査された用水遺構はなく、依拠するのは大規模な地形変化を伴う開発が始まる以前の状況が比較的良く知られる先の大戦直後の昭和23年（1948）の米軍撮影になる航空写真である（写真3）。

それを見ると、旧赤堀町女堀の北部において、独鈷田の上流域にある大間々扇状地の湧水にあたるつつみ沼の直下に導かれる北西方向からの用水遺構が確認される。本用水遺構を北西方向にたどると、北方へカーブしながら連なるように見え、粕川上流域へ向かうと推定される。また、伊勢崎市赤堀町市場附近では、北方から南方に向かう用水遺構が認められ、佐位郡市場村の地券発行にかかる地引絵図によれば粕川水系からの引水と想定される。この市場地内での用水遺構については、昭和35年前後に撮影された航空写真を基にして「粕川水系の水を南下させるための谷（水路）であった可能性が強い。その場合、南側には対象となる沖積地は存在しないことから、東側の独鈷田への導水も可能性としては考えられる」（佐波郡東村教育委員会 1988）とし、この2つの用水遺構は連続する可能性を指摘している。しかし、その判断に際し依拠した航空写真より撮影時期の遡る航空写真に基づけば、上記のように別の用水遺構と考えられるのである。

また、旧赤堀町女堀の北部では、現在、大正用水伊勢崎飯玉支線水利組合が管理する飯玉用水が確認され、粕川から引水し大間々扇状地の扇端低地の谷頭へ供給する様子が見て取れる。

一方、旧赤堀町女堀の東方の延長部では、上記の地引絵図において、その堀内に字名で「女堀」が確認できる。しかし、「女堀は、関東の各地にその地名をなし、おおむね廃溝の通称である」（峰岸 1985）と考えられ、桂川女堀と旧赤堀町女堀の連続性を示す理由にはなり得な

い。

こうした状況を見ると、旧赤堀町女堀は、粕川までの女堀とは連続せず、女堀と同時代の別系統の用水遺構であるか、あるいは時代を異にする用水遺構であると思われるべきであろう。その掘削された時代は、本遺構が明治6年（1873）に作成された地券発行にかかる地引絵図の「佐位郡堀下村」で飯玉用水と重複し、切られていることが確かめられることから、明治6年（1873）以前である。具体的な時代比定等は今後の確認調査に待たなければならない。

本地域は、大間々扇状地の謂わば中央部にあたり、独鈷田の沢の上流部に存在するつつみ沼の湧水を除けば、基本的に乏水地域である。そうした地域の中に大きな労働力を投下した用水施設が築かれているのである。粕川から早川までを視野に入れ、各時代の遺跡のあり方を踏まえて、その築かれた用水の目的を追求する中で、本地域の特性が明らかされなければならない。機会を改めて検討することとしたい。

6. まとめ

上記のように、女堀の終末点については、一般的に伊勢崎市国定町の独鈷田であるとされているが、粕川までとする蓋然性が高いと考えられるのである。もしそうであるとすると、女堀を終末点送水とすることの妥当性とともに、送水先の受益地の再検討が必要となる。問題は小さくないので、本稿への批判を受けた上で、機会を改めて検討することとしたい。

ところで、女堀の終末点を粕川であるとする、現在の桂川女堀の粕川への河口の標高を『伊勢崎市現況図』（図1）で見ると、約93mである。この桂川については、戦後のカスリーン台風における大水害の後、大規模な改修工事が実施されていることが知られ（写真4）、その際の大規模な地形の改変の存在も考慮しなければならない。しかし、明治6年（1873）の上記の絵図でも桂川が同様な流路をとり、女堀の中を東流していることが知られる（図4）。桂川の流路が変えられていないとすれば、粕川の流路との調和の関係で合流部の標高も大きく動いていないと想定し、女堀の粕川への河口部の標高を約93mと見ることとする。

一方、女堀の各地点の地表面の標高を調べると、取水先と想定している前橋市上小出町の標高は約115mで、赤城山麓への取り入れ先の前橋市五代町の「古堀敷」の基部周辺は約102.5mであり、その先の上泉町の藤沢川からの取入口の標高は約100mである。上小出町から五代町までは約4kmであり、その勾配は約1/320である。また、上泉町から粕川までの赤城山麓における約10kmの間の女堀の地表面の勾配は約1/1,400となる。

ポーリング調査により、「上泉町の93.8mと、終末点



写真3 昭和23年(1948)の航空写真に見る用水遺構の状況 (国土地理院 原版 米軍撮影 50V82RSPR1250 71RG 6APR48)



写真4 下触八幡宮境内の災害復旧碑（2011年10月撮影）

西国定の90.6mを結んだ約1/3,700勾配を女堀の想定計画勾配と考え」て、発掘調査地点の堀底の標高値から、「測量ミスによると考えられる計画勾配保持の失敗」が説かれている（小島・齋藤 1985）。

女堀の灌漑用水としての計画勾配については、完工部の堀底の標高値に基づいて評価すべきであるが、女堀の経路と終末点の理解を変えた場合の女堀掘削地点の地表面においては上記のようになり、これまでの理解とは異なることにならざるを得ない。このことについても、稿を改めて検討することとしたい。

また、前稿で述べたように、前橋市五代町の女堀の赤城山麓への引き込み口では、その旧藤沢川の流路を変えていると想定される（飯島 2009）。また、桂川女堀のように、明治6年（1873）の段階で女堀の中に桂川が引き込まれており、示唆的である。つまり、赤城山麓を流下する自然河川とそれを横断する女堀との関係をどう把握するかが女堀の歴史的意味を理解する上で重要な課題である、と言えよう。女堀が終末点通水を目的としたとする見解を検討するためには、途中での分水計画の痕跡を探すだけでなく、女堀はその走行と必ず交差した多くの自然河川とどのように調整を図ったかが問題となるのである。そうした位置づけの中で発掘調査された女堀の遺構のあり方が具体的に検討されなければならないと言えよう。

本稿において想定した女堀の全経路を踏まえ、女堀をその沿線の地域の中で位置づけることを次の課題として提示し、まとめに代えたい。

なお、今後にあつては、少なくとも、粕川を挟んで桂川女堀から旧赤堀町女堀へ問題なく連続するとの既成概念を疑い、そうでない可能性を考えた上で粕川兩岸、と

りわけ左岸の旧赤堀町女堀の西端部、現赤堀南小学校の南部の地点における発掘調査が不可欠と言えよう。

本稿を執筆するにあたり、国土地理院から航空写真、伊勢崎市教育委員会から都市計画図、群馬県立文書館から地券発行にかかる地引絵図の提供を受けました。また、前橋市立荒子小学校の校長園部守央先生、教頭岩上美芳先生には『荒砥村郷土誌資料』の閲覧にあたり御快諾をいただき、岡田昭二氏には『荒砥村郷土誌資料』について御教示をいただき、石田利代氏・鈴木久雄氏には旧赤堀町女堀の旧状や飯玉用水等について御教示をいただきました。さらに川道 亨氏には共に女堀の踏査を重ね、様々な点について議論を行う中で、多くのことについて示唆を受けました。明記して御礼を申し上げます。しかし、本稿において事実誤認や誤解があれば、その責はすべて筆者にあります。

註

- 1) 本書は前橋市立荒子小学校に保管されている。同校には、下記の図書6冊が存在している。いずれも表紙に墨書による表題の記された紙片が貼付され、本文は謄写版刷りで、扉は墨書による。
①『荒砥村郷土誌資料 前編』 1冊 和綴じ。本書の巻末のみに黒色のペン字による「大正十一年十二月 学校長 亀井林次郎」との記載がある。
②『郷土資料 荒砥第一尋常高等小学校』 2冊 黒色厚紙の表紙の紐綴じ。前編部は上記『荒砥村郷土誌資料 前編』と同一のため、前・後編が合冊されたものと推定される。
③『郷土資料 前』(1冊) 黒色厚紙の表紙の紐綴じ。内容は①の『荒砥村郷土誌資料 前』と同一である。
④『郷土資料 後編』(1冊) 黒色厚紙の表紙の紐綴じ。内容は②の後編部と同一である。
⑤『郷土資料 後』(1冊) 黒色厚紙の表紙の紐綴じ。内容は④と同一である。

上記の状況から、①が前編・後編に分けられた正本の前編であり、他はその副本で、前編・後編が合冊になったものと、前編と後編が分

下触八幡宮境内 災害復旧碑
(表面)
災害復旧
耕地整理 桂川改修 記念
衆議院議員久保田円次書
(裏面)
昭和二十二年九月十五日関東地方を襲ったカスリン台風により桂川が大
氾濫し流域耕地は悉くその濁流に押し流され泥濘と砂礫に埋りそこで被
害者は協議し災害復旧耕地整理組合を設立し赤堀村桂川改修護岸工事と
相俟って昭和二十三年五月二十日工事に着手し昭和二十四年夏その工事
の大部を竣工昭和二十五年用水堰波志江用水路工事を完成昭和二十七年
換地事務を終了す
被書面積十九町四反三畝〇歩 復旧面積十八町二反〇八歩
桂川工事延長三軒 工事費耕地整理五百六十五万三千円
桂川工事九百万円 工事請負前橋市阿部建設株式会社
組合設立発起人 (中略)
昭和三十七年如月 建之

けられたものがあり、少なくとも正本は1セット、副本は合冊本が2冊、分冊本が2セット存在したものと推定される。扉の墨書の筆跡、大項目ごとに付けられたインデックスの付け方の同一性等から、すべての図書が同時に作成されたものと推定される。なお、群馬県立文書館では上記の②と同一の書が1冊保管されている。

本書は、群馬県勢多郡荒砥第二尋常高等小学校が昭和十四年十二月五日に発行した『荒砥村郷土史 下』（『郷土誌 “荒砥村” 下』）の中で、「大正十二年十二月編輯にかゝる、荒砥第一校の郷土誌料」、「荒砥村郷土誌」、「荒砥村郷土誌料（後編）」と引用されている図書に該当するものと想定される。

以上のことを踏まえ、本稿においては、本書の名称を『荒砥村郷土誌資料』とし、大正十一年十二月に発行されたものと見なす。

しかし、上記『荒砥村郷土誌資料 前編』とセットになる『後編』を引用したと推定される後述の『荒砥村郷土史』では、「大正十二年十二月編輯」とされており、前・後編で編輯そして発行の時期が異なる可能性もある。

なお、本書中に記載された文章からは執筆者自らが遺構の踏査を踏まえて執筆していることがうかがえる。

- 2) 本書は群馬県立図書館で閲覧した。上下の2巻から成り、いずれの表紙にも「郷土史」と大きく記された下に「荒砥村」と添えられているが、目次には「荒砥村郷土史目録」とあり、奥付には、「昭和十四年十一月五日印刷 昭和十四年十二月五日発行 郷土誌“荒砥村” 奥付 編輯者 群馬県勢多郡荒砥第二小学校内 柵木秀雄・佐竹卓皓（後略）」とある。さらに下巻の奥付の前には「荒砥村郷土史 上下昭和十四年十月三十日編輯 来るべき国史研究会の前に 荒砥第二尋常高等小学校 郷土史調査研究部員」と記されている。上記の状況により、本稿においては本書を『荒砥村郷土史』と呼ぶこととする。本「女堀の溝址」の項の執筆者について、近藤義雄は「（前略）剣持常昌先生が『群研紀要第一輯、荒砥村郷土史下特別精査（中略）に各々論考を掲げておられる。」（近藤 1961）としているが、今までのところ剣持が本書の執筆者であるとは確認できていない。また、峰岸純夫は『伊勢崎史話』における女堀に関する連載論文中の冒頭論文（峰岸 1959.7）の註において、『『荒砥村郷土誌』（伊勢崎女子校、佐竹氏、前橋高校故柵木氏等編）』としているが、女堀の項目の執筆者は今のところ不明である。

引用・主要参考文献（年代順）

- 吉田東伍 1904 富田『大日本地名辞書』第四冊 下 東国 坂東六州 上野 勢多郡 p.3351
 吉田東伍 1915 新田郡の治水墾田『新田氏郷土史論』 pp.291～317
 高橋源一郎 1919 『吉田東伍博士追懷録』
 荒砥第一尋常高等小学校 1922 女堀の溝址『荒砥村郷土誌資料』前編 第十 史蹟名勝天然記念物の部 (三) 古趾 1
 仲野雄介・山崎利雄 1927 『水路と溜池』三版 岐阜市
 剣持常昌 1934 山麓地帯に於ける灌漑用水の地理学的研究『群研紀要』第1号 郷土研究 山麓地帯に於ける灌漑用水の地理学的研究 第一編 pp.37～73
 荒砥第二尋常高等小学校 1939 女堀『荒砥村郷土史』下 特別精査 三
 周東隆一 1950 女堀遺構について―赤城南麓に遺存する灌漑用水址の調査並に研究―『桐生史苑』第1号 pp.16～25
 峰岸純夫 1959.7 赤城南麓灌漑用水遺構女堀について ―『女堀』の概略―『伊勢崎史話』第二巻 第7号 pp.5～7
 峰岸純夫 1959.8 赤城南麓灌漑用水遺構女堀について その(二) 女堀の起点と利根川『伊勢崎史話』第二巻 第8号 pp.9～13
 峰岸純夫 1959.9 赤城南麓灌漑用水遺構女堀について その(三) 女堀の途中の問題『伊勢崎史話』第二巻 第9号 pp.10～13
 峰岸純夫 1959.10 赤城南麓灌漑用水遺構女堀について その(四) ―女堀の終点、目的地、開穿者― 『伊勢崎史話』第二巻 第10号 pp.19～23
 峰岸純夫 1959.11 赤城南麓灌漑用水遺構女堀について その(五) ―女堀の開穿者（秀郷系藤原氏）― 『伊勢崎史話』第二巻 第11号 pp.9～12
 峰岸純夫 1959.12 赤城南麓灌漑用水遺構「女堀」について その(六)

―女堀の開穿者（新田氏の場合）― 『伊勢崎史話』第二巻 第12号 pp.9～15

峰岸純夫 1960 赤城南麓灌漑用水遺構「女堀」について その七(完)『伊勢崎史話』第三巻 第1号 pp.8・9

近藤義雄 1961 用水の歴史「利根と上州」上 みやま文庫2 pp.159～181

早稲田大学史学会編 1964 『生誕百年記念祭 吉田東伍博士年譜と著作目録』

赤堀村誌編纂委員会 1978 『赤堀村誌』

群馬県教育委員会 1980 『女堀 昭和54年度女堀遺跡詳細分布調査実績報告書』

峰岸純夫・山本良知・山本隆志・能登 健 1980 女堀遺跡について『女堀』Ⅰ pp.2～24 群馬県教育委員会

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985 『女堀―中世初期・農業用水址の発掘調査― 泉宮園場整備事業荒砥南部・北部地域に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』

小島敦子・斉藤利昭 1985 開削計画およびその結果『女堀』Ⅲ 女堀の開削とその実行2 pp.75～100 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

鹿田雄三 1985 ハンドオーガーボーリング調査結果『女堀』Ⅲ 女堀の開削とその実行2 開削計画およびその結果pp.80・81 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

能登 健 1985 女堀と中世の水田開発『女堀』Ⅳ 女堀の解明と地域発達史 pp.93～100 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

峰岸純夫 1985 女堀開削の背景『女堀』Ⅳ 女堀の解明と地域発達史 pp.101～108 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

三野 徹 1986 灌漑排水施設計画『新編 灌漑排水』上巻 pp.217～267

群馬県立文書館 1986 『群馬県行政文書簿冊目録 第4集 明治期地図編』

佐波郡東村教育委員会 1988 『佐波郡東村の遺跡―村内遺跡詳細分布調査報告書―』

迅速測図原図複製版編集委員会編 1991 『明治前期 手書彩色関東実測図 第一軍管地方二万分一迅速測図原図複製版』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993 『五目牛清水田遺跡―一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（古代・中近世編）』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第144集

飯島義雄 2001 未完の灌漑用水・女堀の取水予定地の再検討『財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要』19 pp.35～44

千田 稔 2003 『地名の巨人 吉田東伍―大日本地名辞書の誕生』

梅澤重昭 2004 女堀の受益地域を考える―その歴史地理学的考察―『ぐんま史料研究』第二十二号 pp.17～58

飯島義雄 2009 灌漑用水遺構・女堀の赤城山南麓への引水経路の検討『財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要』27 pp.77～96

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009 『荒砥前田Ⅱ遺跡 一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（その1）報告書 古墳時代前期集落遺跡の調査』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第472集

澤口 宏 2010 大間々扇状地―社会基盤としての自然環境―『共同研究 群馬県大間々扇状地の地域と景観―自然・考古・歴史・地理―』自然 pp.7～17

補註

脱稿後、新しい資料も得て粕川を挟んだ桂川女堀と旧赤堀町女堀の関係を改めて検討した結果、旧赤堀町女堀は粕川を東方へと流路を変更させようとした痕跡であり、その変流を前提にして桂川女堀はその変流部の直下まで導かれようとした、と理解するに至った。つまり、赤堀町女堀と桂川女堀は同時に施工されたが、両者は当初計画から連続されることは想定されておらず、結果的に利根川から引水されることがなかったため、粕川も変流させられることがなかったのである。次稿で論述することとしたい。